

---

# チョコレート・フォンデュ

ロリコン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チヨコレート・フォンデュ

### 【Nコード】

N9480P

### 【作者名】

ロリコン

### 【あらすじ】

「うゝゝゝ、着替え着替え」

今、着替えを求めてベッドを飛び出したボクは、来週から高校に通うごく一般的な男の子。

強いて違うところを上げるとすれば、女装に興味があるってことかなー。

名前はルカ・シルバ。

そんなわけでベッドの横にあるクローゼットの扉を開けたのだ。

ふと引き出しを開いて見ると、中には幾つもの女性用ランジェリー

が並んでいた。  
ウホッ、いい下着……。

## ルカ・シルバのあんまりな一日。

「おっ、おっ、おっ、おねえちゃああああんん！！」

「こらこら、朝も早くからなんという騒々しさなんだ、ルカ。男がそんなに取り乱すもんじゃない。お父さんは情けないぞ」

「ひっひっひっ！」

「ちっ、ちっ、違うんだよ、父さん！ これを見て！」

「な、なんだお前。そんな、フリフリのフリルで飾られたきらびやかな女物のパンツをしつかりと両手で握りしめて。まさか、俺達が知らない間に女でも連れ込んだのか？ やるじゃないか！」

「まあ、ルカにも遂に彼女が！？ どんな子なの？ お隣りのルチアナちゃんみたいな素敵な女の子なんでしょうね？ 誘われれば誰とでも寝るような、そんな簡単な女の子だったら、お母さん、許しませんからねっ！」

「ちっがーうッ！ おねえちゃん！ おねえちゃんが！ ボクのタンスを、かつ、勝手に女物の下着だらけにしたんだよ！ おねえちゃん！ ひどいよ！」

「あっはははあん。ルカ、あんたそれ履いてみなさいよ。きっと似合うわよ！ 一昨日の晩みたく、鏡に映してよく見てこらんなさいよ！」

「ヒイツ！ それは、言わない約束だったじゃないかッ！」

「ルカ！ ひょっとしてお前、女装癖があるのかっ！ まったくなんていうことだ！ 俺は常々お前を男の中の男にするための教育を施してきた覚えは全くと言っていいほど記憶にないわけだけれども、我が息子の変態的趣向に僅かな嫌悪感を抱きつつも、ほんの少しだけ興味をそえられる話じゃないか。ほんの少しだけ」

「まあ、女装癖ですって！？ ルカ、本当なの！？ お母さん、そんなの、ほんの少しだけ見てみたい気はするけれども、一般的倫理的に考えて、そんな変態行為はちよつと許さないわよ！ まあ貴方の容姿なら女の子の格好をしても違和感ないでしょうから、仕方がないって早々に諦めもつくってものだけれど！」

「ヒイイツ！ 父さん母さん、そんなわけ無いじゃないか！ そんな、そんな、ボツ、ボクに限って！ 女装癖を持ってるなんてワケが、ナナナ、ないじゃないですかッ！」

「あらあら、それはどうかしらねえ。なにしろ、お父さんの息子だものねえ。ねえ、お父さん」

「おいおい母さん。食事中に、やめてくれないか。気持ち悪くて食べられなくなってしまうよ。せめて食後のコーヒーの時にしておくれ」

「ええーっ、なになに、なんの話？ お母さん、なんのこと？」

「いや、まあ。俺もルカと同じで、若気の至りってヤツさ」

「昔ねえ、お父さんったら、幼なじみのわたしの部屋に勝手に入り込んで、わたしの下着やフリフリのスカートを着て、姿見をうつと

り眺めながら股間をパンパンに腫らすような、れっきとした変態紳士だったのよ。気心知れた仲じゃなければ街の警ら隊に突き出していたところだったわ。ねえ、お父さん！」

「ハハハハハ。いやあ、参ったなあ。とうとう子供達にもバレてしまったか。アハハハハハ」

「ホホホホホ。まったくもう、お父さんったら。わたし今でも、たまにアレが夢に出てきて、うなされるんですからね！」

「ひっひー！　なあんだ。ルカ、良かったじゃないの！　あんたの変態的な女装癖は、あんただけに原因があったわけじゃなかったのよ！　筋金入りの変態のお父さんあつての、変態の子が、あんたつてわけだ！」

「コラッ！　ルル！　お前は実の父親に向かつて、変態だなんて、なんてことを言うんだ！　ルカに対してはともかくとして、お父さんに対するそんな口のきき方は許さんぞ！　俺を変態だと言っているのは、母さんだけだ！」

「そうよ、ルル。ルカはともかく、お父さんにはちゃんと謝りなさい。お父さんったら、今でもストレスが溜まると、その発散に、わたしの服で女装しようとするんだから。お父さんの熊のような筋肉がわたしのお気に入りドレスを着込んだ姿を、ちよつと想像してみてもらいなさい！　ありきたりな怪談話なんて足元に及ばないくらい、背筋が寒くなるおぞましさじゃないの。少しは考えてからものを言いなさい」

「はぁーい。お父さん。ごめんなさい」

「うん。許す」

「ちよちよちよっ！　ちよつとみんな、会話の端々がおかしいんですけど！　ボクは！？　ボクに対しての謝罪はっ！？　どうして、ともかく扱いなんだよっ！？　っていうか！　おねえちゃん！　ボクの下着はどこへやったんだよっ！」

「下着なら、あんた、今、ちゃんと手に持っているじゃないの」

「ちつがーうつ！　元々タンスに入ってた下着だよ！　男物の、ちやんとしたヤツ！」

「そんなの決まってるじゃない。全部捨てちゃったわよ」

「なっ、なんだってー！？」

「捨てたの。二度も言わせないでよ。今日はちよつとゴミの回収日でしょー？　業者が回収を終わらせている頃なんじゃないの？　知らないけど」

「あらほんと。おかあさんがちよつと窓の外を確認してみたら、ちよつとゴミの回収業者さんがやってきて、ゴミ置き場に積み上げられた布の塊を、今まさに持って行くところよ」

「おっ、おっ、おっ、おねえちゃああああんんん！！」

「いいじゃないか。いい機会だよ。ルカ。ちよつとお前に話があったんだ。お前、来月から法都北高校へ入学する話になっていたんだが、あれ、断ったから」

「えっ？　へええっ？　な、なんですってええええ！？」

「ちよつとルカ、あなた、そんな両手で思い切りパンツを引っ張ったら、ゴムどころか生地が伸びてしまうじゃない。破れでもしたらどうするの。勿体ない」

「そーよ。それ、高いんだからね。タンスのだって、全部あんなのお小遣いじゃ買えないくらい高いんだから。あたしが一つ一つ選んであげたのよー？　大切にしなさいよ」

「うきいいい！　今は下着なんて、どーだっていいんだよっ！　そんな事より、お父さん！　なに言ってるの！？　今、なんて言ったの！？　ボクの、北高の入学が、無くなったって、そういう事を言ってるの！？」

「ああ、そのとおりだ。お前が行くのは、北高じゃなくって、あれ、母さん、パンフレットは？　どこにしまったっけ？」

「はいはい。ここにちゃんとありますよ。法都立総合魔術女学校。素敵ねえ。見てこの校舎。かわいい制服！　わたしも憧れたものだったわあ。お腹の中にルルがいなければ、わたしも通っていたかもしれないかったのよあ」

「ままままつ、待ってよ！　今、女学校って言った？　言ったよね！？　確かに言ったよね！　なんでだよあ！　ボク、男だよあお！」

「あれ、アンタ男の子だったっけ？　ひっひ、男の娘でしょーが！　問題ないじゃない！」



「おつ、おねえちゃああん！」

「女装癖があるのなら問題なかるう。お前は外見も、俺の息子だとは到底思えないような、羨ましくも恨めしいほど可愛らしい男の娘だからな。それに、俺の古くからの友人でもある女学校の校長は、女装にも理解と見識のある、度量の大きなやつだ。校長本人が女装癖を持つ変態紳士であることも、男が性別を隠して女学校に入学することに何のためらいもなく了解してくれた変態的決断力の手助けになったことも、明言しておこう。障害なんてなんにも無いじゃないか」

「おつ、おとうさあああん！！！」

「ルカ。いいえルカ子。法都立総合魔術女学校は全寮制のお嬢様学校よ。貴方の初めの試練は、まず完璧に女装して、それを何人にも気取られぬように日々を過ごすこと。その試練は、ひいては女学校を主席で卒業し、法都初の男性魔女の称号を手に入れるため。でもルカちゃん、それで終わってはいけないの。貴方の最終目標は、唯一無二の美貌で法都どころか世界全土を驚愕の渦に陥れ、世の女性たちの危機感を煽り立てる美のトリック・スターに成り上がることにこそあるのだからッ！ おかあさん応援してるわよ、ルカちゃん！ ファイト、ファイト！」

「おつ、おかあさああああんんん！？」

「あんまりだ……こんなの、あんまりだよっ！ どいつもこいつもあんまりだっ！ うっうう、うええん、えーんえーん、あんまりだようう」

「おいおいルカ。まったく、早速もって世の中の男性たちの狩猟本

能に強く訴えかけ、彼らに搾取されるだけに存在する2・5次元世界の美少女が発する記号のような泣き声を上げるだなんて。お前は  
お前の魂に内包する天性の女性性をまったく無意識に利用しながら  
最大の効果を上げることに類まれな性能を発揮する、なんていうか  
これはもう、変態的な天才だ」

「えーんえーん。こんなの、あんまりだあ。あんまりな仕打ちだよ  
お。えーんえーん」

## 登場人物紹介

### ルカ・シルバ

家人が残らず眠りについた深夜、一人忍んで姉の下着やフリフリの  
フリルの付いたブラウスやスカートを、天性のファッションセンス  
で着こなし、鏡に映った自分の可愛らしさに苛烈な精神的高揚を得  
るような、現代社会の歪みが生み出した変態。

### ルル・シルバ

フェミニンな容姿の弟の下着を無断で全部捨て、ラブリーなフリル  
のデザインに定評のある有名女性下着メーカーのものと入れ替える  
ことを趣味とする、生まれついていた変態。

### ルカのお父さん

野生のバッファローを連想させる雄々しく荒々しい顔つきに、ディ  
フェンシブタツクルのように巨大な筋肉で全身を飾る大男でありな  
がら、家の屋根裏にはキングサイズの女性物のドレスや下着を隠し  
持ち、毎週水曜日に自分と同種の趣味を持つ男たちと秘密の女装パ  
ーティを催し、ストレス発散を試みるような、生え抜きの変態。

## ルカのお母さん

幼馴染の彼が女装趣味者であると知りながら、学生時代に彼の子供を身ごもり、周囲の反対を押し切って出産するといった挑戦者であり、自分の息子のあまりに美しい外見に心底好悦し、息子を女学校に入学させようと画策した挙句、ついucciかり実現させてしまった、何者にも屈しない精神を持つ変態。

## ルチアナ・プラチナム

ルカくんの幼なじみ。ルカくんとは乳児の頃から家族ぐるみの付き合いをしている。ルカくんが男でありながら、女学校への入学を果たしたことを知る人物であり、ルカくんの想い人。

## 校長

女装趣味に傾ける情熱はルカのおとうさんに勝るとも劣らない。ネット・ショッピングではなく、自らランジェリーショップに赴き買い物することを休日の楽しみにしており、店員に試着を拒絶されることにも何ら動じることのないワンランク上の変態。

## ?マジエント・ルビー?

ルカくんのルームメイト。成長期途中にして、おっぱいは乳牛の豊満さ、くびれた砂時計の腰付きと、将来の展望輝かしいトランジスタ・グラマー。あだ名はマギ。

## ?エクレア・シヨコラ?

魔女殺傷魔術・呪詛『チヨコレート・フォンデュ』の開発者。

## エクレア・シヨコラの写真立て

エクレア・シヨコラは身支度を整えると、溜息をつき、ベッドに腰掛けた。

小さなサボテンの鉢植えを乗せたナイトテーブルに視線を向ける。テーブルの引き出しに手を伸ばし、そっと開いた。引き出しには伏せられた写真立てが、ひとつ入っている。

エクレアは写真立てを手元に寄せると表に向けて、じっと見つめた。

エクレアの瞳の輪郭が、涙にけぶってゆるゆると歪む。

「あんなに真剣な気持ちでお願いしたのは、後にも先にも一度きりだったわ」

「それなのにね。どうして願いは叶わなかったのかしら」

「どうしてかしら。ねえ、ママ。どうしてなの……」

『チヨコレート・フォンデュ』

『連れて行かないで。連れて行くのはやめて。』

天使たちを遠ざけて。お願いよ。

こんなに近くにいるママを、わたしから引きはがさないで。

離ればなれになんて、なりたくない。どうか、どうかお願いだから。

もしもあなたが、わたしのお願いを叶えてくれるのならば、なんだっつてします。

あなたが望むのならば、もったいい子になります。

朝も昼も夜も、あなたの名前を尊び敬って、毎日欠かさずにお祈りします。

いたずらや口ごたえもしません。勉強をないがしろにすることだつてやめます。

どうかお命じ下さい。わたしはきっと、すべてやりとげてみせます。ママを助けてくださるのならば、どんなことでもします。なんだつてできます。

わたしはこんなにもあなたを愛しているのよ。

なのになぜ、なぜあなたは、わたしから愛を奪おうとするの。

ひどいことをしないで。

もしあなたがママを連れていってしまったら、わたしは一体どうすればいいの？

なにより大切なものと、なにより信じられるものを、一瞬で失ってしまうのよ？

どれほどもがいても、必死になっても、わたしはどんどん沈んでいってしまう。

そんな世界をどうやって生きていけばいいの？

神様。

わたしはママの手を決して離さないわ』

太陽は沈んだ。

レースカーテン越しに、夕闇の青い光が室内に充満している。

1人の少女が、母親の横たわるベッドの傍らに立ち尽くしている。母親に掛けられた清楚なシーツの端から、透きとおるほど白い手がのぞいている。少女はそれを両手で握り締めている。母親の冷たい甲を、親指でやさしくなでている。

うなだれた少女の全身は、母親よりも冷たく深い影に落ち込んでいる。少女の表情は影に隠され、窺い知ることが出来ない。

部屋の扉がゆっくりと、音もなく開く。扉の隙間からオレンジ色の光が差し込んだ。少女の足元の薄青い部屋の床に、長方形をつくる。

男のシルエットが光のなかに、ゆっくりと現れる。

「エクレア。おまえも、少し休みなさい」

少女は応えない。うつむいたまま、母親の手を離さない。

底冷えする空気に静寂が上塗りされる。

やがてオレンジ色の長方形は細く小さく、閉ざされてゆく。部屋は再び薄闇の中へ戻された。

少女の涙がひとしずく、母親の手の甲にこぼれ落ちる。

## ルカママの青春郷愁。

【まえがたり】

ルカ・シルバは女学校へ進学する男の娘。家族が寝静まった深夜、忍び手に入れた姉の衣服を着飾って、姿見の前で繰り広げる、独り乱痴気騒ぎを、密かに愉しむ趣味をもつ、とってもかわいい男の娘。その夜も、姉の部屋から拝借した、フリフリフィルのブラウスト、フリフリフィルのスカートの、愛らしさを散りばめた衣装に、いそしみながら袖を通し、小さな胸を高鳴らせ、たいそう心をときめかせ、ワンマン・ファッションショーに興じていた。そのさなか、ついうっかり鍵を閉め忘れた自室の扉の、僅かに開いた隙間から、廊下に漏れ出る光の筋を、おりしも用便を足すため臥所を抜け出し、廊下をゆく姉が見とめた。漏れる明かりを目にした姉は、一体なにかと不審を抱き、静かに扉に近寄りて、弟の様子を覗き確かめると、そこにあるのは、嗚呼。なんたるちあ、サンタルチア。恍惚のチークで頬を、まことしやかに桃色に染めあげ、健やかな微笑みを姿見に映す、まごうことのない、変態の存在であつた。弟の痴態を目の当たりにした姉は、寸前で繰り広げられる、讃嘆たるも惨憺な光景に心おののかせ、鞭打たれたように身をわななかせ、居ても立つてもいられずに、荒々しく扉を開け放ち、同時にその身を滑り込ませ、はつとこちらを振り返った弟の、驚きにまぶたをめくり上げた、まんまるの瞳に、指先を向けてお腹を抱えて、かなりの大爆笑をした。弟は雪とも見まちがう、真っ白な灰になり代わり、なすすべなくしてはらはらと、その場に崩れ落ちた。長いまつげを、森の草木にまといつく、澄清なる朝露のような、艶めく涙にしつとりと濡らし、その滴を頬に落とした弟の、不憫な身の上を憐れんだ姉は、今宵目にした光景は、決して他には漏らすまいと、弟の前でかく誓い、約束を交わした。弟の涙を優しくぬぐい、弟を胸にいだいて慰めて、

姉はついに、弟の心を安らがせたのである。

『といったような出来事があつただけど、おねえちゃんって生き物は大概、ボクたち弟にとって天敵なんだ。シルバ家もその例に漏れなかったよ。次の日の深夜、おねえちゃんはボクが寝静まったのを見計らって、ボクの部屋に足音も立てずに忍び入ると、部屋のクローゼットから、ぼつボクの下着を……下着を、全部、女物のパンツやブラジャーに入れ替えたんだッ！一枚も残さずに！寝ていたボクが履いていた下着まで、きつ、着せ替えたんだ！ビックリしたとか、そういうレベルじゃないんだよ！犯罪だよッ！朝起きて、下半身の違和感に、シーツとジャージをめくり上げたボクは、ボクは、頭がどうにかかなりそうだったよ！でも……でも！それだけじゃないんだ！おねえちゃんは！それだけじゃなかったんだよ！父さんと母さんには、絶対に言わないでって、あんなにお願いしたのに！泣きながらお願いしたのにッ！早速バラしたんだよ！ボクの、じよっ、女装してたことを、笑いながら2人にバラしたんだよ！すごく嬉しそうな顔で、全部バラしたんだよ！あんまりだ。ひどいよ！ひどいよおねえちゃん！うええん。えーん、えんえん』

ナレーション「椅子から崩れ落ちると足元にしゃがみ込み、小さな子供がするように膝を抱え、ワンワンと泣き出したルカ君。つい今まで、僅かの憂いを含んでいたものの、ハキハキと受け答えしていたルカ君の、突然の変わり様に、インタビュワーの男性は表情を困惑に曇らせ、椅子から腰を浮かして、ルカくんの肩にそっと手を伸ばした。が、なにか躊躇われたようで、男性は傍らに控えている助手の女性に、助けを乞うような視線を送った。助手の女性、彼女もまた深い困惑の色をその表情に浮かべていたが、インタビュワーの男性と視線を合わせると、手にしていた黒革の装丁の手帳を、傍らの机に乗せ置き、ルカ君の隣まで歩み寄ると、音も立てずにそっと



しやがみ込み、震えるルカ君の華奢な肩を両手に包みこむと、ルカ君の泣き声に合わせて、優しくさするのだった。彼女がルカくんにできるめいっぱいの慰めであった」

【了】

「おっ、おっ、おっ、おねえちゃああああんん！！」

「チツ。朝っぱらから、うつさいわねえ。男が取り乱すんじゃないよ！ あれ。なんか見たことあるわあ、この光景。既視感っていうの？」

「ふざけないでよっ！ っていうか！ だいたい想像がついてしまっているから、本当は聞きたくないんだけど、おねえちゃん！ ボクの、ふ、服が、クローゼットから全部なくなってるじゃないか！ どーいう事なんだよっ！」

「ああん？ 服ならあったでしょ？」

「全部、入れ替わってるじゃないか！ 残らず全部、女物になってるじゃないか！ ノースリーブチュニック！ シャーリングの効いたホルターネックワンピース！ レース編みのカーデイガン！ 大きなリボンが付いたコクーンスカート！ フリフリフリルのミニスカート！ フリフリの！ フリルが！ なんかフリルがたくさんあったよ！ いったいなんてことをしてくれたんだよっ！」

「ひやははっ、楽しそうじゃないの、ルカ！」

「楽しいわけないだろっ！」

「うつさいなあ。ちゃんとあんたのこと考えて買ってきたんですけど？ あんた、あたしと違って、貧乳だしさあ。まあパッド詰めりやいいんだけど、めんどいっしょ。だから肩とか鎖骨とかを見せるトップスにしたの。あとボトムスは、あんた脚が白いいし細いし、ソコソコイけるから、スカートの丈の長さとか、ほどよくフィットするパンツとか、ちゃんと思立ってたわけよ。ね？ おねえちゃんもテキトーにホイホイ買ってたあげてるわけじゃないんだよ？ あんたの事、ちゃんと考えてるんよ！」

「ちゃんと考えてて、どうして弟に女物を買ってくるんだよっ！意味が解らないよっ！」

「なによお、ルカ。あんた、自分の正直な気持ちに嘘付いたってしょうがないんだからね？ 女装がしたいんでしょ？ 法都中の人たちに向かつて、ボクは女装がしたいです！ って、泣き叫びながら告白したいんでしょ？ あんたが黙ってたって、こないだの件で全部バレてんだからさあ。諦めなさいよ。それに、今更どうこうしたって、女学校への入学は覆せないっつの。お母さんだけじゃなくて、お父さんも今じゃノリノリなんだから」

「うつう……ひどいよ。こんなのは、あんまりだよお」

「チッ。ウゼーから泣くんじゃねえって言ってんだろ！ 男が泣いていいのはねえ、親兄弟が死んだ時と、パイプカット手術の前日だけよ」

「グスグスン。ぜんぜん意味が解らないよ」

「ホレ、いい加減諦めて、さっさと部屋に戻って服を着て来なさい

よ。そしたらあんたを写メで撮って、ルチアナにメールしなくちゃいけないんだから」

「ななななっ、なに言ってるんだよっ！ そっ、そんな事、させるわけないだろ！」

「なによ。せつかくあたしが選んであげた服を、着てくれないの？」

「ふふふふざけないでよ！ 当たり前だろ！ なんでルチアナに送られるって判ってるのに、わざわざ写真を撮られるって判ってるのに、女装しなくちゃならないんだよ！」

「マジで？ 困ったなあ、ルチアナも楽しみにしてるんだけどなあ」

「ちよっ！ 待ってよ！ 今なんて言った!？」

「ああ。昨日ルチアナと電話してたんよ。そんで、ルカの女装の話をしたんだけどさ、そしたら、ルチアナが見たいから写メ送れって、どうしても見たいって、言うから。オツケオツケーって」

「おっ、おっ、おっ、おねえちゃああああんん!!」

「うわわわわっ、ちょ、なによっ！ なに熱くなってるの!？」

「怒るに決まってるんだろ！ ルチアナに、喋ったの!？」

「そうだけど、写メ送ってあげるって言ったただけだよ？」

「女装のこと言ったの!？ 女装したボクの写真を撮って送るって、そう伝えたの!？」

「うん。でも……。動画じゃないんだよ？」

「そこじゃなくて！ そーいう問題じゃない！」

「写メだつて、壁紙より小さいサイズのだよ……？」

「だからっ、そーいう問題じゃねえって、言ってるだろっ！」

「あらあら、ルルちゃんルカちゃん、どうしたの？ 口論の内容はルカちゃんの大きな声で、大体察しが付いているけれど。全裸であるうと推測される体に、厚手のバスタオルを胸元まで隠すように巻きつけたその姿。ルカちゃん、あなたお風呂あがりなの？」

「あつ、おかあさん！ 聞いてよ！ おねえ、ちゃ、ん……が……。うわあああああッ！ おっ、おかあさああああんんんん！？」

「ひやははっ！ ルカ、あんた今、二度見！ お母さんを二度見したでしょ！」

「お、おおおおお、おかあさん……。そ、その服……！」

「どう？ 昨日、ルカちゃんの制服が仕立て上がったから、受け取りに行ったんだけれどね。あんまり制服が可愛くって、お母さんやっぱり我慢できずに着てみちゃったの！ 似合うでしょ？ あら、やっぱり？ そうなんでしょ？」

「い、いやいやいや……似合うとか、じゃ、なくて、その……」

「それでねえ昨晚、お父さんにも見せてあげたのよ。そしたらお父さんだったら、なんだか異様に興奮しちゃってね。久しぶりにハッスルしたわ！ あっ、大丈夫！ 制服は汚してないんだからね。ちよつとしわになっちゃったけど」

「えつと……なんて、言ったらいいのか、その。それよりも、お母さん……」

「ポニーテール……！」

「ポニーテール！ ひやはははっ、ハモった！ いやーそれにしても、お母さん。その年でポニーテールは、さすがのわたしも、ひくわぁ」

「なによ！ いいじゃない、お母さんだってカワイイ格好したいのっ！ ポニーテールにしたら、お肌が引っ張られて、張りがぜんぜん違うんだから！」

「おっおかあさん……」

「うっん、それにしてもやつぱり、ルカちゃんに合わせて仕立ててもらった制服だから、ルカちゃんよりも背の高いお母さんにとっては、ちよつと下品な膝上25センチのスカート丈だね。でも、お母さんの脚線美が余すところなく拝観できるってんだから、実害はないどころか、世の男性諸君にとっては良薬ですらあるわ！ 見てごらんなさい、あとのサイズは、測ったようにぴったんこよ！ ルカちゃんの代わりに、お母さんがこれを着て学校へ通おうかしら！？」

「ひっひっ！ おかあさん、胸囲のサイズまでぴったんこね！ あーらら、この場合は『ぺったんこ』と、表現し直すべきかしらっ！

ひやはっはーッ！」

「あらあら、ルルちゃんったら。かつて体重3トンを超えるホッキョクグマを一撃で屠ったおかあさんの伝説のハイキックで、おっぱいを削ぎ取られたいの？ でも今ならまだ、古来は東洋より伝わる秘技・DOGE-ZAで、お母さんに許しを乞うチャンスを与えてあげてもよくつてよ」

「ひっひっひ……どこいしょ、っと。おかあさん、ごめんなさい」

「うん、許す」

「さあさあ、ルカちゃん！ あなた、いつまでお風呂上がりみたいなのぼせた顔でボケツとしてるつもり？ あなたは今日、魔女学の校長先生と面談のお約束があるんだから！ さつさと部屋に戻って、フリフリフリのお洋服に着替えていらっしやい！」

「え。ええっ？ そんなの、きいてないよおおッ！？」

【あとがたり】

ナレーション「ルカ君の背後から、三人組のコメディアンのホログラムが飛び出した。コメディアンの一人、小太りの男が、被っていた野球帽を乱暴に掴み取ると床に向かって叩きつけた」

【了】

### 三毛猫の恋は虹を渡る。

君は犬で、ボクは猫だった。

ボクは君に恋した。

君もボクに恋してくれた。

ボクは君の大きな背中の上に寝転んで、ずっと一緒に日なたぼっこが出来ればよかったんだ。

オレンジ色の日々を、きつといつまでも過ごしていられるんだろうって、

そんなふうに思っていたんだよ。

君はゴールデンレトリバーだったけれど、ゴールドではなかったね。いつかに見た教会の花嫁みたいに、真っ白い毛並みだった。

君はボクの斑々の模様がほしいうて言っていたっけ。

でも似合わないからよしなよ。

もし君が猫に生まれ変わっていても、

きつと白い毛皮がよく似合っているよ。

君はご主人様の次に、ボクを恋してくれた。

ボクはずっと君が一番だったよ。

お日様よりも恋してる。

ご主人様は、ランク外だ。

猫じゃらしや、ネジ巻きで走るネズミのオモチャなんかより、ずっと

とずっと下だ。

ご主人様は少しぐはぐだったから、君と散歩をしていると、突然大きな声で怒り出したり、突然すごい速さで走りだしたり、

バネのオモチャみたいにピョンピョン飛び跳ねたりしていたね。ボクはいちいちビックリして、オドオドしたよ。

それからね、君は知らなかったろうけれど、

ボクはご主人様に尻尾をつかまれて、

ハンマー投げみたいに振り回されたことがあるんだよ。

本当にあのときは、尻尾が抜けてしまうんじゃないかって思ったよ！

だけど君は、僕と違って、ご主人様のどんな奇行にも動じずに、大地の女神みたいにどっしりと構えて、それでいてクリクリとした無邪気な瞳で、いつもご主人様を見上げていたね。

ご主人様が君の大した忠義心に感動して、君の頭をいつまでも撫でている光景は、ほんの少しだけ羨ましかったんだ。

ボクはご主人様じゃなくなつて、誰かに撫でられるのが、好きじゃないからね。

君は物質に気を遣らない女性だったね。

ご主人様がたまにくれる骨付き肉も、ほとんどボクにくれちゃって、残った骨のかけらをガリガリするだけだったね。

隣の家の犬みたいに、ご主人様のスリッパやボールを



庭に掘った穴の中へ埋めることもしなかった。

そんな君が、タンポポの綿毛を見つけた時の敏さには驚いた。  
春のある日、散歩の途中で突然強い風が吹いて、

道端の白い綿毛が舞い上がり、君の視界を横切ったとき、

君はご主人様の手の中から紐をもぎ取る勢いで、ロケットみたいに  
駆け出して、

空中に飛び上がると、がぶがぶと綿毛に食いついたね。

どうしてあんなに執着していたのかな。

ボクは君に聞いて確かめることが、遂にできなかったよ。

鼻の頭にくっついていた綿毛に、気を取られていたせいかな。

君の体が悪くなったのは突然だった。

一日会わなかったただけなのに。

君があんまりいきなり、やつれて、痩せてしまったから、ボクは驚  
いてしまった。

風船だってあんなにすぐには、しばまないって思うんだ。

骨と皮になってしまった君は、走ることも歩くこともままならない  
し、

立ち上がることでさえ、身体中を震わせながら、やっとだった。

君と散歩にも行けなくなつて、ご主人様は悲しんで、

普段にましてふさぎこんでしまっていたね。

君が一度でいいから入ってみたいって、

庭からガラス越しに眺めながらつぶやいていた、ご主人様の部屋の  
中を、

どんなふうにしたのかな。

でも、ご主人様の部屋の中でじっとしている君は、  
もう目も鼻もきかなかったし、耳だって、

ボクの声はずっと遠くで鳴るラジオと勘違いするほどだったから、ボクはやぼったくって、聞かないことにしたんだよ。

ご主人様が、一日中寝たきりの君を気遣って買ってきた、フカフカのクッションは、とってもお気に召したみたいだね。

「わたしの眼の力は貴方に持っていて欲しいの。貴方が次に愛したひとに渡してくれれば、いいのよ」

「君以上に誰かを愛することなんか、もう出来ないんじゃないかって、思うよ」

「明日のことなんか、誰にも分からないのよ。魔女だって明日の天気が晴れるのか、雨が降るのか、確かに判ることが出来ないんですもの」

前の晩に、君は意識を取り戻すと、ボクに虹色の力を譲り渡した。ボクは君の力を受け取ったけれど、そんなことよりも、君がいなくなってしまった後のことばかりが頭をよぎっていた。とても不安だった。

ボクはご主人様のことが、嫌いだったけど  
嫌いだったけど  
ずっとずっと嫌いだったけど

君の白い体を両腕でしっかりと抱え  
大きな涙をボロボロと流し

垂れてくる鼻水を拭き取りもせず  
全身であえぎながら

庭にうずくまる彼女の姿を見ていたら  
心の底から嫌っていたことなんか  
もう、そんなの、どうだっていい。  
そんなのはどうだってよかった。

空はよく晴れて、

雲は地平線にほんの少しだけだったのに。

せつなかった。

どれくらい経ったのかなあ、  
ご主人様は小屋を片付けたけど、君の首輪は毎日欠かさず磨いて、  
見つめていたよ。

ボクはその日初めて、君抜きで散歩に出かけたんだ。  
空き地だった土地に新しい家が立っていてね、君の白い毛皮みたい  
に眩しい壁だった。

青い芝の上に揺りかごがあつて、中には人間の赤ちゃんがいたんだ。  
赤ちゃんの瞳が、君のまるい瞳に瓜二つだった。

本当にそっくりだったんだよ。

だから、ボクは、君から受け取った虹色を右手の肉球に込めて、  
赤ちゃんの額に埋め込んだ。

パズルのピースみたいにパツチリと入ったんで、ボクはとても満足  
だったよ。

でも、その場に君がいたなら、きっとボクを笑っただろうね。

「ハッチ、この子は、男の子なのよ」

二階建ての白い家。

背の高さを揃えた蒼い芝の絨毯を敷き詰めた広い庭。

洗濯紐の一端が家の軒先、もう一端が庭木のナツメに、それぞれ結わえつけられている。洗いたての洗濯物を紐に掛け、ピンチで端を止めるルカママ。芝に埋もれて見えない素足。ルカママの傍らに、籐製のゆりかごに入った赤ちゃん、ルカ・シルバ。

ハチは三毛猫。庭先の塀の上をバランスよく歩いている。ふとゆりかごのルカに気が付く。ハチ、塀のてっぺんから芝の上に音もなく飛び降りる。ゆりかごに近づく。

ハチ、ゆりかごの縁に手をかける。ゆらゆらと揺れる。さざ波の寄せては返すように。

ハチ、ゆりかごの縁からルカを覗き見る。ルカがハチに気付く。ルカ、両手をワサワサと動かし、「ウー、ラー」とハチに挨拶をする。

ハチとルカ、じっと見つめ合う。

「あらあらルカちゃん。にゃんこ先生があなたに会いにやってきたわよ」

ルカママ、ハチに気が付く。手にしていた洗濯物を一度カゴに戻し、ゆりかごに歩み寄ると腰を折って屈み、慈愛の溢れる笑顔で、ルカとハチを交互に見つめる。

「ほうらルカちゃん、にゃんこ先生はあなたにご挨拶したいみたい。なになに？ うん。にゃんこ先生はこう言ってるわ。『ルカくん、ようこそ地球へ！』」

ハチ、ルカママの言葉に、彼女の顔を見上げてニヤアと応える。ルカママが嬉しそうに笑う。ハチ、ゆりかごの中に半身を乗りあげてルカに顔を近づける。ルカ、栗色の瞳でハチをじっと見つめる。ルカ、「アー、ウー」とハチを歓迎する。ハチ、ルカの額をペルペルと舐める。ルカ、小さな腕を上下に揺する。

「あらにゃんこ先生つたら。そうでしょ？ この子、すごくかわいいでしょ？」

頬に手を当てて微笑むルカママ。

ハチ、自分の右手をペルペルと舐め、ぐしぐしと顔を拭ってから、その肉球でルカの額をペタペタと触る。ゆりかごの中を砂粒ほどの妖精がパチツと音を立てて散乱し、七色の閃光を発する。閃光は一瞬で空間に潤み、見えなくなる。ルカママにはほんの少しだけ虹色が見えた。

「まあ、祝福をくれたの？ 嬉しいわ。ルカちゃんに代わってお礼を言わなくちゃね。素敵な虹色を、どうもありがとう」

ハチ、後ろ足を地面につけるとゆりかごから身を離す。ルカママ、ハチの頭を撫でようとする。が、ハチ、ルカママの手からするりと抜ける。ルカママと目を合わせ、ヒゲを揺らしてニヤアと鳴くと、芝の絨毯をてぽてぽと歩いていく。庭木のナツメに近づくと大きく跳躍し、幹を駆け上がる。枝を伝い、隣家の屋根まで器用に上がると、去っていく。

ルカママ、ハチを見送るとゆりかこの傍らにしゃがみ込む。目を閉じ、眠そうな小さな声を上げるルカの様子に微笑んで、彼の額を優しく撫でる。

チカチカと虹色の粒子が光の中に美しく弾ける。  
空はよく晴れて、雲は少しもなかった。

ルカ・シルバは【虹色の光彩】を手に入れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9480p/>

---

チョコレート・フォンデュ

2011年11月7日22時11分発行